バングラデシュ南部避難民救援事業（フィールドホスピタル）

2018 年 11 月 5 日～12 月 5 日　大阪赤十字病院薬剤師　山地優依子

★この事業の背景について

2017 年 8 月下旬、ミャンマーでの迫害を受け、大量の避難民が隣国バングラデシュへ流入しました。その数は 100 万人規模に達します。特にミャンマーとの国境に近い、バングラデシュ南部コックスバザールには、大規模な避難民キャンプが点在し、そこで今も多くの人々が生活しています。世界赤十字連盟(IFRC)は、昨年 8 月より各国赤十字社と協力して、避難民の方々に対する支援事業、Population Movement Operation(PMO)を行っています。この大きな事業の中で、日赤をはじめとするいくつかの国の赤十字社が現地で医療支援を行っています。その中で病床・手術室を有し、24 時間患者を受け入れる野営病院があります。それが、今回私が派遣されたバングラデシュ赤新月社 Emergency Field Hospital(BDRCEH)です。

★フィールドホスピタルについて

BDRCEH は、フィンランド赤十字社が経営母体となり、バングラデシュ赤新月社(以下バ赤)と各国赤十字社から派遣された海外派遣要員が共同で運営している野営病院です。外来診察室、入院病棟(産科、小児科、成人患者用男女別の病棟)、手術室を有し、24 時間患者を受け入れて内科診療および外科処置を行っています。外科処置は、外傷・骨折から帝王切開まで多岐に亘ります。

野営病院（フィールドホスピタル）正面ゲート

今回私は、院内で使用される医薬品や医療資機材・消耗品を調達・供給・管理する、メディカルロジスティシャン(以下メドログ)という業務を担当しました。
た。

救急車と要員移動用車両

★メドログの仕事とは

メドログの業務は、診療に必要なあらゆる物資、例えば医薬品、血液製剤、医療用消耗品等の調達・供給・管理です。現地で

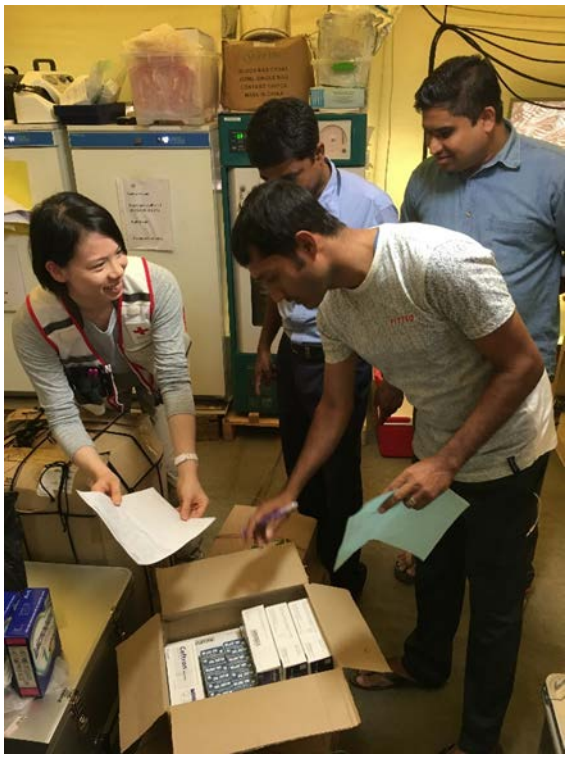
は、メドログの私とバ赤薬剤師であるHossainさんの二人で業務を行っていました。

薬局テント

左から薬局、倉庫２つ(他に屋外テント、コンテナあり)

① 調達

主な調達先は、製薬メーカー、薬局、医療資機材を扱うお店、WHOや国境なき医師団等の人道支援団体からの寄付です。どうしても現地では手に入らない、でも必要不可欠！というものについては、経営母体であるフィンランド赤十字社から派遣要員に託してもらうという奥の手を使いました。



医薬日エーカーから納品された医薬品の受け取り

マレーシアフィールドホスピタルで：
破傷風トキソイドを借りに行った際の１枚

発注は、在庫状況や各部署からの要望を受け、必要性と必要量を吟味した上で行います。メドログ専用のパソコンとスマートフォンを使い、メール・SNS・電話を駆使して先方に発注をかけます。日本では考えられませんが、現地のお店や薬局に発注をかける際は、メールだけでは店員さんが気付いてくれないので、必ず電話が必要です。業者の方に英語が通じないことが多いため、Hossain さんやバ赤の通訳スタッフに電話をしてもらっていました。

薬局内の様子。左端が輸液置場。棚は左から注射剤、内服薬・外用薬、医療用消耗品の順に並べられている。

血液製剤(全血)はバ赤が運営している血液センターから購入していました。近隣で血液を扱っている施設がないため、他のフィールドホスピタルや、診療活動を行っている人道支援団にも血液製剤を提供していました。一方で、血液製剤は発注してもすぐには手に入らないため、25 日間という保存期間を踏まえて、タイミングよく発注をかけ、使用頻度が少ない血液型は最小限の在庫に留めるよう心掛けていました。

血液製剤。O＋が最も使用頻度が高い。

調達の面では、Square 社の医薬品と血液製剤だけは、業者さんが病院まで配達してくれていましたが、それ以外の物品は、病院から車で１時間半の街まで買い出しに行く必要がありました。買い出しの担当は主に Hossain さんで、週に１回のペースで、半日かけて軽トラック一杯の物資の調達を行っていました。

WHO や IFRC が備蓄している医薬品・医療用消耗品も最大限活用していました。週に一度、両団体から備蓄品リストがメールで送られてくるので、その中から必要な物を選んで寄付を受けていました。

② 供給

週に 4 日、薬局から各病棟へ必要物品を供給するオーダー日を設けていました。各病棟からのオーダー用紙に基づいて医薬品・医療資機材を集め、各部署に物品を供給します。物品を運ぶ際は、力持ちの Strong Man たち(ポーターさん)が手伝ってくれます。普段日本の病院で勤務している時には見たことの無いような医療消耗品が山のように存在し、名前

と実物を一致させるのには苦労しました。また、薬局と４つの倉庫(テント３つとコンテナ)があるので、どこに何があるのかを把握するのも大変でした。ここでも、私よりフィールドホスピタルでの勤務が長いHossainさんに随分と助けて頂きました。

薬局のドアに各病棟のオーダー日を掲示している

病棟からのオーダーを確認している様子

出産後の親子に提供するマタニティーセット

バ赤薬剤師のHossainさん

③　管理

医薬品・医療用消耗品合わせて約700種類に上る資材を薬局と4つの倉庫で保管していました。温度管理が必要な医薬品は、空調のある薬局内に保管し、薬局内の室温が常に25℃前後になるよう管理していました。また、薬局内には医薬品と血液製剤用の冷蔵庫があり、これらも温度が適正な範囲内にあるかを毎日チェックしていました。また、医療資機材を保管するためには清潔な環境が重要ですが、病院の敷地内には大量のラットやネズミがいて、倉庫でばったり遭遇ということもしばしばです。そのため、院内のいたるところにネ

ズミ捕りが置かれています。薬局内のネズミ捕りも毎日技術要員さんがメンテナンスを行ってくれていました。

医薬品の使用量と医薬品・一部の医療用消耗品の期限管理はエクセルファイルの在庫管理表で管理していました。医薬品については出納をつけており、月一回棚卸をして実数とデータに乖離が無いかを確認します。

外来診察室での医薬品オーダーが頻繁であったことから、在庫管理表を使って月平均の使用量を算出し、過料投与と思われる薬品については、医師に適正使用を促しました。この結果、胃薬と広域に作用する抗生剤の使用量が減少しました。

使用期限を過ぎたものについては、焼却可能なものは院内にある焼却炉で処分していました。

★大変だったこと

一番大変だったことは、普段薬を買っている業者から急に薬が手に入らなくなった時です。時に、流通状況によって急に特定の薬が品薄になり、発注しても納品されないことがあります。また、値段が数十倍に高騰することもあります。なんで急に⁉と嘆いてもいられないので、他団体とのネットワークを駆使し、なんとか必要数の薬品の調達を図ります。具体的には IFRC や他の人道支援団体に寄付を依頼したり、フィンランド赤十字社から調達する事もあります。また、たとえ値段が高騰しても、病院運営に必須の薬品であれば、必要量を検討した上で購入に踏み切ることもあります。メドログには、その薬の必要性と、必要量についてアセスメントを行い、決断を下すことが求められます。なかなか一筋縄ではいかずやきもきすることもありましたが、無事薬品が納品された時の達成感は何物にも変えがたいものです！

★生活の様子

派遣中の生活についても少しご紹介します。病院の各部署も、職員の生活スペースも全てテントです。派遣要員は２人で一つのテントを使用します。内部がパーテーションで仕切られているので個人のスペースは確保されています。（お隣さんの音は聞こえますが）テント内に簡易ベッドが置かれ、その上に寝袋を敷いて寝ていました。水洗トイレ・温水シャワーが完備されており、洗濯機で衣服の洗濯もできます。食事は、職員食堂と派遣要員専用のカフェスペースが利用でき、美味しく食事を頂くことが出来ました。（食費は自費です）

要員用テント

テント内にラットが進入するなどの事件はあ

ったものの、クリーナーさんや技術要員さんたちが毎日環境整備を行っていてくれたお陰で、毎日元気に業務を行うことが出来ました。

ネズミ捕りに捕まっているネズミ

ある日の夕食

要員のカフェスペース「スターバックス」

★活動を振り返って

今回は私にとって２回目の海外派遣でした。前回の派遣でも日赤 ERU(緊急対応型ユニット)チームのメドログとして活動しましたが、今回はメドログの役割を本当の意味で理解する貴重な経験となりました。前回と比べ物にならないほど沢山の物品を扱い規模の大きさ

に圧倒されましたし、発注については急に供給が難しくなったり、現地調達が難しく、購入歴がない管理薬を購入したりと、一つ一つの案件に頭を悩ませる日々でした。また、現地の業者さんやバ赤スタッフとのやり取りを通じて、バングラデシュと日本の文化の違いにも驚きました。一筋縄ではいかないことがほとんどでしたが、カウンターパートのHossain さん、バ赤および海外派遣要員の看護師さん・医師、バ赤の通訳スタッフはじめ、多くの方々と協働することで、無事活動を終えることが出来ました。分からないことは情報収集して、同僚とディスカッションして、そこからアセスメントして答えを出す。時間はかかりますが、重要なプロセスです。

現在日本赤十字社は、今回私が活動したフィールドホスピタル同様、病院型の緊急対応型ユニットの準備を進めています。今回の経験を活かし、準備段階および実際の活動においても、メドログ部門で貢献していきたいと思います。

そして、今もなおキャンプでの生活を余儀なくされている避難民の方々が、少しでも穏やかな毎日を過ごすことが出来るよう願い、今後も支援活動に貢献していきたいと思います。

最後になりましたが、派遣期間中にご支援いただいた本社国際部の皆様、大阪赤十字病院国際救援部および薬剤部の皆様、そして海外派遣要員である薬剤師の先輩方に御礼申し上げます。